加藤　それは、大学が決める事であるべき私は、発言する

マックス・ウェーバーと私のゼミナールの学生たち

山口和男
（本学経済学部助教授）

今年度、私は三年生のゼミナールでマックス・ウェーバーの社会・歴史理論の研究をテーマとしてとりあげることにし、目下学生諸君とともに勉強中である。数年前にも一度私はウェーバー関係の書物を講読のテキストに選んだことがあるが、その時も今度も、ゼミナールをはじめる前に一種のためらいを感じたのである。それはひとつには、御承知のようにウェーバー理論の内容がきわめて難解であり、しかもそれを解説すべき教師である私のウェーバー研究歴がわずか一〇年そこそこであって、ウェーバー理論を正確に伝達できるかどうか自分で不安であるのと、またひとつには、一般に当今、もっぱらエレキと漫画になじんでいる大学生諸君の知識に対する欲望力は衰弱しており、食欲を消化力もないこれらの少年大学生たちにウェーバー理論という成人向き栄養食を与えるのは、学生相手にやたらと難しいことをひけらかしたがる若い教師にありがちの虚栄ではないか、と反省をするからである。しかしそういうためらいにもかかわらず、多少の無理を承知でこの前も今度も強行してしまった。

この前の私のウェーバー・ゼミは、ひとつの悲しい不幸な出来事とむすびついている。というのはそのゼミに参加して非常によく勉強した学生の一人が、学期の終りに自殺してしまったのだ。自殺の理由はくわしくは分らないが、報せを聞いて駆けつけた私に家族から手渡されたのは、死の前に書いたと思われるゼミのレポートであった。しかしそのレポートにも自殺すべき理由は何ら記されてはいなかった。当時三年生であったこの学生には、まだもちろんウェーバーの社会科学方法論や宗教社会学などの高次の領域へふみこむ力はなく、解説書や伝記などを英訳本で細々とよむか、あるいはウェーバー著作の邦訳書をまさぐりまさぐり読むほかなかった

のだが、このレポートによると、それでもウェーバーという人間の与えた感銘は大きかったようだった。対立と緊張にみちた時代の中で、神経病と闘いながら自らの知的志向を貫ぬき通したウェーバーには、超人的な知力と意志力とが備わっていたのだ。しかし人間の将来と時代の行くすえに対するかれの展望は、全く暗いペシミズムにぬりつぶされていたし、機械化という運命の前に個人の力の及ぶ範囲はかれにとっては、絶望的に小さかった。ウェーバーの人間としての生き方の強靱さは、かれの無力感・絶望感の逆説的な表白であったのであり、そこにこそかれが「闘争する勇敢なるペシミスト」(W・コンツェ)と名づけられる理由もあった。自殺の前のレポートから、知的認識力によって人間の弱さや無力さと闘おうとしたウェーバーの心情へのこの学生の憧憬がまざまざとよみとれた。その時私は、理論的な概念の操作を通じてでなくても、人間の生き方についての悩みや反省の材料として、かれの中にもウェーバーが染透っていたことを知った。

論理性の化身とも思われるウェーバーが、ゲミュートリヒに学生に訴える力をもつのは一見して奇異に見えるけれども、そこからウェーバー理論へのアプローチの出発点が生れるのならそれでよいのではないか。私はそう考えた。マス化された社会に埋没した、いわゆる「疎外状況」におかれた個人が、時として感じる疑問や反抗感情、それを知的に構成して諸々の学問的な概念装置の世界に眼をむけさせる、そういうチャンスとしてのマックス・ウェーバーを強引に学生に押しつけてもよいのではないか。私はそう考えるのだ。

そして他方では、研究者としての私は私なりのウェーバー研究の必要を痛感している。くわしく論じるいとまはないが、ウェーバーがマルクス主義理論を一種の「発見的原理」heuristic principle として利用したように、逆にわれわれはウェーバー理論とひとつの有効な発見的方法として用いうると思う。認識の全体性を主張する理論が、それだけの頽廃におちいらぬためには、ブルジョア社会科学の頂点ウェーバーを克服する必要があるであろう。とくにわが国のウェーバー・フェチシズムを正しく批判するために、ぜひそれは必要である。こういうふうな緊張感を、私はウェーバー研究について抱くのであるが、学生のゼミナールを成功的に営むための教師の側の要件のひとつが、その主題に対する教師の側の研究意欲にあるとすれば、私が学生にウェーバーを押しつける理由のなにがしかは明らかであろう。

今年度の私はウェーバー研究ゼミナールが、うまくゆくかどうか、今のところは分らない。ある学生は、ロマン・ロランの小説やマルタン・デュ・ガールの「チボー」と並べてよむと、その歴史的コンテクストにおいてウェーバーは「おもろい」と言い、またある学生はウェーバーの「カリスマ」という語の音が「気に入った」と言って連発する。私はそのたびに安堵したり、苦笑したりもするのである。

(一九六五年一〇月)